

感染症発生動向調査情報に基づく埼玉県の患者発生状況

—2012年—

山田文也 尾関由姫恵 白石薫子 渡邊悦子

安藤紗絵子 斎藤章暢 岸本剛

Infectious diseases surveillance reports in Saitama Pref. in 2012

Fumiya Yamada, Yukie Ozeki, Kaoruko Shiraishi, Etsuko Watanabe, Saeko Ando, Akinobu Saito, Tsuyoshi Kishimoto

はじめに

感染症発生動向調査事業は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律（感染症法）」の第12条から16条に基づく全国サーベイランスで、一類から五類感染症、新感染症、指定感染症及び新型インフルエンザ等感染症の患者を診断した医師から届出を受け、感染症の地域的な流行の実態を早期かつ的確に把握し、その情報を速やかに地域に還元するものである。当所では、2004年4月から、「感染症発生動向調査実施要綱」に基づく埼玉県感染症情報センターとして、埼玉県における感染症の発生についての情報収集、解析及び提供を行っている。2012年のサーベイランスでは、新たな報告対象疾患の追加はなかったが、4月（第13週）から感染症サーベイランスシステム（National Epidemiological Surveillance of Infectious Disease : NESID）が刷新され、NESID内に構築された「感染症発生動向調査システム」と「病原体検出情報システム」の情報連携及び「感染症発生動向調査システム」の結核（届出）と「結核登録者情報システム」間の情報連携が図られた。また、インフルエンザ入院サーベイランスは、NESID内に構築された「汎用サーベイランスシステム」に統合され、国への報告システムの一元化が図られた。

本報告では、全数把握対象疾患および定点把握対象疾患として報告されたものを集計対象とし、埼玉県基幹情報センターとして収集した、さいたま市及び川越市を含む全県の届出をまとめた。

対象及び方法

届出対象疾患を表1-1, 2に示す。対象疾患の集計は、NESIDシステム内の感染症発生動向調査システムの数値を用いた。集計は、全数把握対象疾患と月単位報告の定点把握対象疾患は診断日が2012年1月1日から12月31日まで、週単位報告の定点把握対象疾患については、2012年1月2日（第1週）から2012年12月30日（第52週）までの報告を対象とした。

結果

1. 全数把握対象疾患の発生状況

一類から三類感染症の患者届出数を表2-1に、四類感染症を表2-2に、五類全数把握対象疾患を表2-3にそれぞれ示した。また、調査期間中に指定感染症及び新感染症に指定さ

れた疾患はなかった。

(1) 一類から三類感染症

一類感染症は、疑似症を含め届出はなかった。二類感染症は、結核1,409例の届出があり、前年の1,577例より減少した。病型別では、患者994例、無症状病原体保有者（潜在性結核感染症）407例、疑似症7例、感染症死亡者の死体（死体検案症例）1例、で患者が届出の70.5%を占め、前年の65.3%と比べ6.2ポイント増加した。

三類感染症は、細菌性赤痢12例、腸管出血性大腸菌感染症130例、腸チフス1例、パラチフス1例の届出があった。このうち細菌性赤痢、腸チフス、パラチフスは前年より増加した。また、コレラの届出はなかった。

1) 細菌性赤痢

細菌性赤痢は、男で30歳代、40歳代各1例の計2例。女では20歳代7例、30歳代2例、50歳代1例の計10例であった。届出は9月の6例が最も多く、次いで8月の2例、1月、3月、4月、5月に各1例で、病型別では、患者10例、無症状病原体保有者2例であった。最も届出の多かった9月の6例のうち20歳代女患者2例、無症状病原体2例の4例は海外ツアー同行者で血清型はいずれもsonneiであった。その他の患者は散発的で、推定感染地域は、1月の届出が国内で血清型はflexneri3aであったが、3月以降の届出は全例が海外で、血清型はsonneiが8例、flexneriが3例であった。

2) 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は、男50例、女80例の計130例の届出があり、前年の146例と比べ減少した。年齢階級別では、10歳未満から90歳代に分布し、男10歳代、女10歳未満が最も多い。届出は、2月と3月を除く各月にあり、6月から9月の届出が85例と多く前年までと同様の傾向を示した。病型別では、患者88例、無症状病原体保有者42例であった。また、患者のうち7例が溶血性尿毒症症候群（HUS）で、HUSは前年の1例と比べ増加した。血清型別では、血清型O157が80例と最も多く届出の61.5%を占めた。その他の血清型では、O26が19例、O121が18例、O111が6例、O145が3例のほか、O8、O103、O128、O165が各1例であった。検出の多かったO26の

表1-1 感染症法における届出対象疾患

感染症類型	疾患名	届出の可否			届出方法		
		患者	(*) 疑似症	無症状病原 体保有者	定点種 別	時期	内容 (**)
一類	エボラ出血熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	クリミア・コンゴ出血熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	痘そう	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	南米出血熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	ペスト	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	マールブルグ病	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	ラッサ熱	○	○	○	(全数)	直ちに	a
二類	急性灰白髄炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	結核	○	○	○	(全数)	直ちに	a
	ジフテリア	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	重症急性呼吸器症候群(病原体がSARSコ ロナウイルスであるものに限る)	○	○	○	(全数)	直ちに	a
鳥インフルエンザ(H5N1)	○	○	○	(全数)	直ちに	a	
三類	コレラ	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	細菌性赤痢	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	腸管出血性大腸菌感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	腸チフス	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	パラチフス	○	×	○	(全数)	直ちに	a
四類	E型肝炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎を含む)	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	A型肝炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	エキノコックス症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	黄熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	オウム病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	オムスク出血熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	回帰熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	キャサナル森林病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	Q熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	狂犬病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	コクシジオイデス症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	サル痘	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	腎症候性出血熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	西部ウマ脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ダニ媒介性脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	炭疽	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	チクングニア熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	つつが虫病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	デング熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	東部ウマ脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	鳥インフルエンザ(H5N1を除く)	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ニパウイルス感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	日本紅斑熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	日本脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ハンタウイルス肺症候群	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ロウイルス病	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	鼻疽	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	フルセラ症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ベネズエラウマ脳炎	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ヘンドラウイルス感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	発しんチフス	○	×	○	(全数)	直ちに	a
	ボツリヌス症	○	×	○	(全数)	直ちに	a
マラリア	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
野兔病	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
ライム病	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
リッサウイルス感染症	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
リフトバレー熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
類鼻疽	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
レジオネラ症	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
レプトスピラ症	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
ロッキー山紅斑熱	○	×	○	(全数)	直ちに	a	
新型インフルエンザ 等感染症	豚インフルエンザ(H1N1)****e	○	○	○	* * * d	直ちに	a

* 疑似症 : 疑似症とは、明らかに当該感染症の症状を有しているが、病原体診断の結果が未定の者を指す。

**内容 : a : 氏名,年齢,性別,職業,住所,所在地, 病名,症状,診断方法, 初診・診断・推定感染年月日,感染原因,感染経路,感染地域,その他(保護者の住所氏名)

b : 年齢,性別, 病名,症状,診断方法, 初診・診断・推定感染年月日,感染原因,感染経路,感染地域

c1 : 年齢,性別 c2 : 年齢,性別, 原因病原体の名称, 検査方法

*** : 集団的な発生が疑われる場合のみ届出

d : 患者の属する施設の名称及び所在地, 患者から聴取した疫学情報

****: e:季節性インフルエンザ(五類インフルエンザ)へ移行

うちの5例と0121の16例は、県内外の保育園を中心に発生した集団感染事例関連患者であった。また、HUS患者の血清型は、0157が4例、0145が2例、026が1例であった。

3) 腸チフス・パラチフス

腸チフスとパラチフスは、4月に30歳代女1例の届出があり、同じ患者からの同時菌検出であった。推定感染地域は海外であった。

(2) 四類感染症

四類感染症は、A型肝炎3例、つつが虫病2例、デング熱5例、マラリア9例、レジオネラ症57例、レプトスピラ症1例の計77例の届出があった。

1) A型肝炎

A型肝炎は、1月に60歳代女1例、3月に10歳未満女2例の計3例の届出があり、3月の2例は家族内での複数患者発生であった。診断方法はいずれも血清IgM抗体の検出で、推定感染

表1-2 感染症法における届出対象疾患

感染症類型	疾患名	届出の可否			届出方法			
		患者	(*) 疑似症	無症状病原 体保有者	定点種別	時期	内容 (**)	
五	アメーバ赤痢	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
	RSウイルス感染症	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
	咽頭結膜熱	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
	インフルエンザ(鳥インフルエンザを除く)	○	×	×	内科 小児科	次の月曜	c1	
	ウイルス性肝炎(E型肝炎及びA型肝炎を除く)	○	×	×	(全数)	7日以内	b	
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
	感染性胃腸炎	○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
	急性出血性結膜炎	○	×	×	眼科	次の月曜	c1	
	類	急性脳炎 (ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介性脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ペネズエラ馬脳炎及びリスタバレー熱を除く)	○	×	×	(全数)	7日以内	b
		クラミジア肺炎(オウム病を除く)	○	×	×	基幹	次の月曜	c2
クリプトスポリジウム症		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
クロイツフェルト・ヤコブ病		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
劇症型溶血性レンサ球菌感染症		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
後天性免疫不全症候群		○	×	○	(全数)	7日以内	b	
細菌性髄膜炎		○	×	×	基幹	次の月曜	c2	
ジアルジア症		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
水痘		○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
髄膜炎菌性髄膜炎		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
性器クラミジア感染症		○	×	×	STD	翌月初日	c1	
性器ヘルペスウイルス感染症		○	×	×	STD	翌月初日	c1	
尖圭コンジローマ		○	×	×	STD	翌月初日	c1	
先天性風しん症候群		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
手足口病		○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
伝染性紅斑		○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
突発性発しん		○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
梅毒		○	×	○	(全数)	7日以内	b	
破傷風		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
バンコマイシン耐性 黄色ブドウ球菌感染症		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
バンコマイシン耐性 腸球菌感染症		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
百日咳		○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
風しん		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症		○	×	×	基幹	翌月初日	c2	
ヘルパンギーナ		○	×	×	小児科	次の月曜	c1	
マイコプラズマ肺炎		○	×	×	基幹	次の月曜	c2	
麻しん		○	×	×	(全数)	7日以内	b	
無菌性髄膜炎		○	×	×	基幹	次の月曜	c2	
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症		○	×	×	基幹	翌月初日	c2	
薬剤耐性アシネトバクター感染症		○	×	×	基幹	翌月初日	c2	
薬剤耐性緑膿菌感染症	○	×	×	基幹	翌月初日	c2		
流行性角結膜炎	○	×	×	眼科	次の月曜	c1		
流行性耳下腺炎	○	×	×	小児科	次の月曜	c1		
淋菌感染症	○	×	×	STD	翌月初日	c1		

* 疑似症 : 疑似症とは、明らかに当該感染症の症状を有しているが、病原体診断の結果が未定の者を指す。

**内容 : a : 氏名、年齢、性別、職業、住所、所在地、病名、症状、診断方法、初診・診断・推定感染年月日、感染原因、感染経路、感染地域
その他(保護者の住所氏名)

b : 年齢、性別、病名、症状、診断方法、初診・診断・推定感染年月日、感染原因、感染経路、感染地域

c1 : 年齢、性別 c2 : 年齢、性別、原因病原体の名称、検査方法

表2-1 一類、二類、三類感染症の届出数

	疾患名	埼玉県		
		2012年	2011年	2010年
一類	エボラ出血熱	0	0	0
	クリミア・コンゴ出血熱	0	0	0
	痘そう	0	0	0
	南米出血熱	0	0	0
	ペスト	0	0	0
	マールブルグ病	0	0	0
二類	ラッサ熱	0	0	0
	急性灰白髄炎	0	0	0
	結核	1409	1577	1191
	ジフテリア	0	0	0
	重症急性呼吸器症候群	0	0	0
三類	鳥インフルエンザ(H5N1)	0	0	0
	コレラ	0	0	2
	細菌性赤痢	12	7	7
	腸管出血性大腸菌感染症	130	146	124
	腸チフス	1	1	0
	パラチフス	1	0	0

地域は60歳代の患者が国内、10歳未満は海外であった。

2) つつが虫病

つつが虫病は、5月に50歳代女、12月に60歳代男各1例の届出があり、前年の1例より増加した。診断方法は、いずれも間接蛍光抗体法又は間接免疫ペルオキシターゼ法による血清抗体の検出であった。推定感染地域はいずれも県内であった。

3) デング熱

デング熱は、9月に30歳代男1例、40歳代女1例のほか、2月に20歳代男、8月に10歳未満男、10月に20歳代男の計5例の届出があり、前年の4例より増加した。診断方法は、血清IgM抗体の検出が3例、検体から直接のPCR法による病原体遺伝子の検出が2例であった。また、9月届出のあった2例はツアー同行者間の発生で、そのほかに患者間の関係は認められなかった。推定感染地域はいずれも海外であった。

4) マラリア

マラリアは、20歳代から50歳代の男7例、10歳未満と30歳代の女2例の計9例の届出があり、前年の1例より増加した。届出は、8月の3例が最も多く、次いで6月2例、2月、3月、7月、10月に各1例であった。診断方法は、全例が血液検体の鏡検による病原体の検出で、病型別は、熱帯熱マラリアが5例、三日熱マラリアが4例であった。推定感染地域は全例が海外であった。

5) レジオネラ症

レジオネラ症は、男41例、女16例の計57例の届出があり前年の38例より増加した。年齢階級別では、男が10歳未満から80歳代に分布し、60歳代が21例と最も多い。女は、10歳代から80歳代に分布し、70歳代の6例が最も多い。全体では60歳以上が届出の82.5%を占めた。届出は5月を除く各月にあったが、12月が12例と最も多く、その中に保健所の調査で把握された公衆浴場の利用者4例が含まれていた。病型別では、肺炎型56例、80歳代女1例がポンティアック熱型であった。診断方法は、全例が尿中抗原の検出で、推定感染地域は、国内55例、海外2例であった。

(3) 五類感染症

五類感染症の全数把握対象疾患は、アメーバ赤痢45例、ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)9例、急性脳炎18例、クロイツフェルト・ヤコブ病7例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症8例、後天性免疫不全症候群42例、ジアルジア症3例、髄膜炎細菌性髄膜炎1例、先天性風しん症候群1例、梅毒31例、破傷風5例、バンコマイシン耐性腸球菌感染症7例、風しん97例、麻しん30例の計304例の届出があり、クリプトスポリジウム症、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症の届出はなかった。

表2-2 四類感染症の届出数

	疾患名	埼玉県			疾患名	埼玉県		
		2012年	2011年	2010年		2012年	2011年	2010年
四類	E型肝炎	0	1	1	鳥インフルエンザ(H5N1を除く)	0	0	0
	ウエストナイル熱	0	0	0	ニパウイルス感染症	0	0	0
	A型肝炎	3	5	17	日本紅斑熱	0	0	0
	エキノコックス症	0	1	0	日本脳炎	0	0	0
	黄熱	0	0	0	ハンタウイルス肺症候群	0	0	0
	オウム病	0	0	0	Bウイルス病	0	0	0
	オムスク出血熱	0	0	0	鼻疽	0	0	0
	回帰熱	0	0	0	ブルセラ症	0	0	0
	キャサナル森林病	0	0	0	ベネズエラウマ脳炎	0	0	0
	Q熱	0	0	0	ヘンドラウイルス感染症	0	0	0
	狂犬病	0	0	0	発しんチフス	0	0	0
	コクシジオイデス症	0	0	0	ボツリヌス症	0	0	0
	サル痘	0	0	0	マラリア	9	1	3
	腎症候性出血熱	0	0	0	野兎病	0	0	0
	西部ウマ脳炎	0	0	0	ライム病	0	0	0
	ダニ媒介性脳炎	0	0	0	リッサウイルス感染症	0	0	0
	炭疽	0	0	0	リフトバレー熱	0	0	0
	チクングニア熱	0	0	-	類鼻疽	0	0	1
	つつが虫病	2	1	0	レジオネラ症	57	38	31
	デング熱	5	4	5	レプトスピラ症	1	0	0
	東部ウマ脳炎	0	0	0	ロッキー山紅斑熱	0	0	0

表2-3 五類感染症の届出数

	疾患名	埼玉県		
		2012年	2011年	2010年
五類	アメーバ赤痢	45	34	39
	ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)	9	9	5
	急性脳炎	18	17	14
	クリプトスポリジウム症	0	0	0
	クロイツフェルト・ヤコブ病	7	8	3
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	8	6	8
	後天性免疫不全症候群	42	43	33
	ジアルジア症	3	5	5
	髄膜炎菌性髄膜炎	1	1	0
	先天性風しん症候群	1	0	0
	梅毒	31	19	17
	破傷風	5	3	2
	バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症	0	0	0
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	7	1	5
	風しん	97	7	2
麻しん	30	29	28	

1) アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、男38例、女7例の計45例の届出があり、前年の34例より増加した。年齢階級別では、男で40歳代の14例が最も多く、20歳代から70歳代に分布した。女は、30歳代と40歳代が各3例と20歳代が1例であった。病型別では、腸管アメーバ症男29例、女7例の計36例、腸管外アメーバ症5例、腸管及び腸管外アメーバ症4例であった。診断方法は、鏡検による病原体の検出が37例で、そのうち5例では血清抗体の検出が実施されていた。その他8例は血清抗体の検出であった。感染経路は、経口感染が8例、性的接触が8例、その他29例は不明であった。性的接触のうち、異性間性的4例、同性間性的接触4例であった。推定感染地域は、国内が41例、海外が4例であった。

2) ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)

ウイルス性肝炎は、男7例、女2例の計9例の届出があり、前年と同数の届出であった。病型別では、B型肝炎7例、C型肝炎1例のほか、サイトメガロウイルス(CMV)肝炎1例であった。B型肝炎は、60歳代、50歳代、30歳代各2例のほか10歳代女1例で、10月に2例のほか、4月、5月、6月、8月、12月に各1例の届出があった。診断方法は、全例がIgM HBe抗体の検出で、推定感染経路は、性的接触5例、不明2例で、性的接触の内訳は、異性間性的接触2例、同性間性的接触3例であった。推定感染地域は、国内6例、不明が1例であった。

C型肝炎は、12月に50歳代女1例の届出があった。診断方法は血清診断で、推定感染経路は、異性間性的接触であった。また、推定感染地域は国内であった。

CMV肝炎は、20歳代男1例の届出があった。診断方法は血清診断で、推定感染経路は、同性間性的接触、推定感染地域は国内であった。

3) 急性脳炎

急性脳炎は、男8例、女10例の計18例の届出があり、前年の報告数17例を上回った。年齢階級別では、10歳未満から

60歳代に分布し、10歳未満が9例と最も多く、そのうち2例は1歳未満であった。その他の年齢階級では、30歳代3例、20歳代と40歳代が2例、10歳代と60歳代が1例であった。

4) クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)

CJDは、男5例、女2例の計7例の届出があり、前年の8例より減少した。年齢階級別では、男が80歳代3例、70歳代と90歳代が各1例、女は60歳代と70歳代が各1例であった。病型は孤発性プリオン病6例で、80歳代男1例が家族性プリオン病であった。また、診断の確実度は、ほぼ確実が5例、疑い(脳波に周期性同期性放電(PSD)を認めない)が2例であった。

5) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、男5例、女3例の計8例の届出があり、前年の6例より増加した。年齢階級別では、男が30歳代1例、50歳代から80歳代が各1例、女は60歳代2例、70歳代1例であった。届出は、4月と12月が各2例のほか、3月、7月、10月、11月に各1例の届出があった。診断方法は、全例が分離同定による病原体の検出で、血清型はA群6例、B群とG群が各1例であった。推定感染地域は全例が国内であった。

6) 後天性免疫不全症候群(AIDS)

AIDSは、男37例、女5例の計42例の届出があり、前年の43例より減少した。年齢階級別では、男で30歳代が11例と最も多く、次いで20歳代10例、60歳代6例、40歳代と50歳代が各4例のほか10歳代が2例であった。女は、20歳代が2例、30歳代、40歳代、60歳代が各1例であった。病型別は、無症状病原体保有者が男18例、女3例の計21例で届出の50%を占めた。また、AIDS患者は男15例、女2例、その他(AIDS指標疾患以外の発症者)男4例であった。推定感染地域は、国内が30例、海外が9例、不明3例で、感染経路は、性行為感染が35例、静注薬物使用が2例、不明5例であった。性行為感染の内訳は、異性間性的接触が男8例、女4例、同性間性的接触が男21例、異性・同性間性的接触が男1例、異性同性不明が男1例であった。

7) ジアルジア症

ジアルジア症は、男2例、女1例の計3例の届出があり、前年の5例より減少した。年齢階級別では、男が50歳代と30歳代、女は20歳代であった。診断方法は、全例が鏡検による病原体の検出で、届出は、10月に男女各1例12月に1例で、推定感染地域は海外2例、国内1例であった。

8) 髄膜炎菌性髄膜炎

髄膜炎菌性髄膜炎は、10月に40歳代男1例の届出があった。診断方法は、分離同定による病原体の検出で、推定感染地域は国内であった。

9) 梅毒

梅毒は、男27例、女4例の計31例の届出があり、前年の19例より大きく増加した。年齢階級別では、30歳代の9例が最も多く、次いで20歳代と40歳代の6例の順で10歳代も3例の届出があった。届出は、11月を除く各月にあり、1月が6例と最も多い。病型別では、無症状病原体保有者男11例、女2例の計13例、早期顕症梅毒Ⅰ期男7例、女1例の計8例、早期顕症梅毒Ⅱ期男8例、女1例の計9例、晩期顕症梅毒男1例であった。また推定感染経路は、性行為感染が26例で、異性間性的接触が12例、同性間性的接触が7例、異性同性不明が7例であった。その他5例は感染経路不明の届出であった。

10) 破傷風

破傷風は、40歳代と70歳代の男各1例と70歳代の女3例の計5例の届出があった。届出は8月に2例、7月、9月、12月に各1例で、診断方法は全例が臨床診断であった。創傷部位は上腕が2例、下肢が1例、不明2例であった。推定感染地域は、全例が国内であった。

11) バンコマイシン耐性腸球菌 (VRE) 感染症

VRE感染症は、男2例、女5例の計7例の届出があり前年の1例より増加した。年齢階級別では、70歳代と80歳代が各3例、90歳代が1例であった。診断方法は、分離同定による病原体の検出が6例、PCR法による病原体遺伝子の検出が1例で、検出された菌株は、*Enterococcus casseliflavus* VanCが2例、*E. faecium* VanAと*E. faecalis* VanBが各1例、*E. faecalis*(毒素未同定)2例、菌種未同定1例であった。推定感染地域は、全例が国内であった。

12) 風しん

風しんは、男71例、女26例の計97例の届出があり、前年の7例より大きく増加した。年齢階級別では、10歳未満から50歳代に分布し、男で30歳代が27例と最も多く次いで40歳代20例、20歳代14例の順で、女は20歳代の12例が最も多く次いで50歳代の4例、30歳代と10歳代の各3例、40歳代と10歳未満の各2例の順で、男女とも1歳未満の届出はなかった。届出は、第24週(5/21~27)から増加が認められ、届出数の多い状況が年末まで続いた。診断方法は、検査診断例84例、臨床診断例13例で、想定感染地域は国内93例、不明が4例であった。また予防接種歴は、1回接種有りが8例、なしが25例、不明64例で、2回の接種歴有りは認められなかった。

13) 麻しん

麻しんは、男13例、女17例の計30例の届出があり、前年の29例より増加した。年齢階級別では、男で30歳代が5例と最も多く次いで10歳未満、10歳代、40歳代の各2例、20歳代と50歳代が各1例であった。女では、10歳未満の7例が最も多く、次いで30歳代の6例、20歳代3例、10歳代1例の順であった。届出は、年間を通じてあり、地域、学校での患者集積は認められなかった。病型別では、検査診断例11例、臨

床診断例8例、修飾麻しん11例で、臨床検査により届出られた、検査診断例と修飾麻しんの22例はいずれも抗体検査による届出であった。推定感染地域は、国内26例、海外1例、不明3例であった。また、予防接種歴は、有り15例、なし8例、不明7例で、有りのうち2回接種は4例であった。

(4) 獣医師が届出を行う感染症

獣医師が届出を行うエボラ出血熱(サル)、マールブルグ病(サル)、ペスト(プレーリードッグ)、重症急性呼吸器症候群(イタチアナグマ・タヌキ・ハクビシン)、結核(サル)、鳥インフルエンザH5N1(鳥類)、細菌性赤痢(サル)、ウエストナイル熱(鳥類)、エキノコックス症(イヌ)および新型インフルエンザ等感染症(鳥類)の10疾患の届出はなかった。

2. 定点把握対象疾患の動向

五類感染症定点把握対象疾患の週単位報告の週別報告数、定点当たり報告数を表3-1, 2に示した。また、月単位報告の月別報告数、定点当たり報告数を表4に、性年齢階級別報告数を表5に示した。

(1) 内科・小児科定点把握対象疾患の動向

1) インフルエンザ

2012年のインフルエンザは、前年末に引き続き年当初から増加が始まり第5週に最大値を記録し、その後第7週まで高い水準が維持された。第8週以降減少に転じたが、前年と比べ大きな流行年となった。また、年末冬期の流行は12月に入り観察され、第49週に定点当たり1.00を超えた。

(2) 小児科定点把握対象疾患の動向

1) RSウイルス感染症

RSウイルス感染症の累積報告患者数は3,236人、定点当たり報告患者総数は20.88で、前年より増加した。年始の流行は、第1週(1/2~8)の定点当たり0.44をピークに下降したが、8月以降報告数が増加し前年までの同時期と比べ報告数の多い状況が11月まで続いた。定点当たり報告数の最大値は第40週(10/1~7)の定点当たり1.44で過去5年間の最も高い値を示した。

2) 咽頭結膜熱

咽頭結膜熱の累積報告患者数は2,443人、定点当たり報告患者総数は15.76で前年を大きく下回った。4月以降6月まで緩やかな報告数の増加を観察したが、6月から8月まで報告数は前年を大きく下回ったまま、減少に転じた。11月以降観察された緩やかな増加は、年末まで続いた。定点当たり報告数の最大値は、第30週(7/23~29)の定点当たり0.66で、前年の最大値を大きく下回った。

3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の累積報告患者総数は16,439人、定点当たり報告患者総数106.06で、前年と同水

6) 手足口病

手足口病の累積報告患者数は4,181人、定点当たり報告患者総数26.97で、前年を大きく下回った。夏期に報告患者数の緩やかな増加が認められ、定点当たり報告数の最大値は、第30週(7/23～29)の定点当たり1.44であった。

7) 伝染性紅斑

伝染性紅斑の累積報告患者数は607人、定点当たり報告患者総数3.92で、前年の報告数を大きく下回った。年間を通して際立った流行は認められなかった。定点当たり報告数の最大値は定点当たり0.16で第3週(1/16～22)、第23週(6/4～10)、第26週(6/25～7/1)の3週が同値であった。

8) 突発性発しん

突発性発しんの累積報告患者数は5,146人、定点当たり報告患者総数は33.20で、前年とほぼ同水準の届出であった。年間を通して際立った流行は認められず、定点当たり報告数の最大値は、第37週(9/10～16)の定点当たり0.85であった。

9) 百日咳

百日咳の累積報告患者数は132人、定点当たり報告患者総数0.85で前年と比べ減少した。年間を通して際立った流行は認められず、定点当たり報告数の最大値は、第22週(5/28～6/3)の定点当たり0.06であった。

表 3-2 定点報告対象疾患の推移・定点当たり報告数(インフルエンザ・小児科・眼科・基幹定点 週単位報告)

Table with columns for week, date, and various diseases including Influenza, Infectious Mononucleosis, Hand, Foot, and Mouth Disease, etc. Includes summary rows for 2012, 2011, and a 2012/2011 ratio.

※表中の数値は、小数第3位で四捨五入
※(入院)インフルエンザについては、2011年第36週から報告が始まった。

10) ヘルパンギーナ

ヘルパンギーナの累積報告患者数は7,618人、定点当たり報告患者総数49.15で前年とほぼ同水準の報告があった。夏期をピークとする一峰性を示し、定点当たり報告数の最大値は、第28週(7/9～15)の定点当たり8.35で前年の最大値を超えた。

11) 流行性耳下腺炎

流行性耳下腺炎の累積報告患者数は2,653人、定点当たり報告患者総数17.12は前年に引き続き減少した。年間を通して際立った流行は認められなかったが、夏期まで漸増傾向を示し、定点当たり報告数の最大値は第29週(7/16～22)の定点当たり0.62で以後緩やかに減少に転じた。

(3) 眼科定点把握対象疾患の動向

1) 急性出血性結膜炎

急性出血性結膜炎の累積報告患者数は52人、定点当たり報告患者総数1.27で前年と比べ増加した。年間を通して報告があり、定点当たり報告数の最大値は、0.10で第7週(2/13～19)、第19週(5/7～13)、第20週(5/14～20)と第31週(7/30～8/5)に記録した。

2) 流行性角結膜炎

流行性角結膜炎の累積報告患者数は984人、定点当たり報告患者総数24.00で、前年と同水準の報告があった。年間を通して報告があり、際立った流行は認められなかった。定点当たり報告数の最大値は、第6週(2/6～12)の定点当たり0.70であった。

(4) 基幹定点把握対象疾患の動向

1) 細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎の累積報告患者数は9人、定点当たり報告患者総数1.00で前年と比べ減少した。年間を通して報告があり、定点当たり報告数の最大値は第12週の定点当たり0.22であった。

2) 無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎の累積報告患者数は21人、定点当たり報告患者総数2.33で、前年と比べ大きく減少した。年間を通して散発的な届出で、定点当たり報告数の最大値は、定点当たり0.22で第9週、第13週、第30週、第47週に報告があり際立った流行は認められなかった。

3) マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマ肺炎の累積報告患者数は1,153人、定点当たり報告患者総数128.11は前年に引き続き増加した。年間を通して報告数は増加傾向を示し、定点当たり報告数の最大値は第40週(10/1～7)の定点当たり4.67で過去5年間では2010年に次ぐ高値であった。

4) クラミジア肺炎(オウム病を除く)

クラミジア肺炎の累積報告患者数は54人、定点当たり報告患者総数6.00は、前年と比べ増加した。年間を通して報告があり、定点当たり報告数の最大値は0.44で、第9週(2/27～3/4)と第43週(10/22～28)に記録した。

5) インフルエンザ(入院患者)

インフルエンザ入院患者の累積報告患者数は212人、定点当たり報告患者総数23.56であった。定点当たり報告数の最大値は内科・小児科定点報告インフルエンザとほぼ同時期の第7週(2/13～19)の定点当たり3.22で以後減少し、年末冬季の増加は第51週以降観察された。

6) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症(MRSA)

MRSAの累積報告患者数は男性116人、女性66人の計182人、定点当たり報告患者総数20.22で、前年より減少した。定点当たり報告数の最大値は2月の定点当たり2.78であった。

7) ペニシリン耐性肺炎球菌(PRSP)感染症

PRSPの累積報告患者数は、男性27人、女性14人の計41人、定点当たり報告患者総数4.56で、前年を大きく下回った。定点当たり報告数の最大値は4月の定点当たり1.11で、以後

表4 定点把握対象疾患の推移(基幹定点・性感染症定点 月単位報告)

月別	性器クラミア感染症		性器ヘルペスウイルス感染症		尖圭コンジローマ		淋菌感染症		メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症		ペニシリン耐性肺炎球菌感染症		薬剤耐性緑膿菌感染症		薬剤耐性アシネトバクター感染症	
	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数	報告数	定点当たり報告数
1月	69	1.30	35	0.66	28	0.53	41	0.77	17	1.89	8	0.89	-	-	-	-
2月	88	1.60	26	0.47	15	0.27	51	0.93	25	2.78	8	0.89	-	-	-	-
3月	91	1.65	38	0.69	17	0.31	42	0.76	16	1.78	8	0.89	-	-	-	-
4月	95	1.73	41	0.75	18	0.33	32	0.58	16	1.78	10	1.11	-	-	-	-
5月	102	1.85	37	0.67	33	0.60	33	0.60	16	1.78	3	0.33	-	-	-	-
6月	114	2.04	39	0.70	30	0.54	26	0.46	14	1.56	-	-	-	-	-	-
7月	135	2.41	34	0.61	16	0.29	49	0.88	12	1.33	-	-	-	-	-	-
8月	116	2.11	32	0.58	23	0.42	36	0.65	19	2.11	-	-	3	0.33	-	-
9月	140	2.50	50	0.89	27	0.48	53	0.95	16	1.78	-	-	-	-	-	-
10月	140	2.50	49	0.88	27	0.48	55	0.98	9	1.00	2	0.22	1	0.11	-	-
11月	106	1.93	46	0.84	23	0.42	53	0.96	13	1.44	2	0.22	1	0.11	-	-
12月	133	2.42	48	0.87	25	0.45	48	0.87	9	1.00	-	-	1	0.11	-	-
合計	1,329	24.12	475	8.62	282	5.12	519	9.42	182	20.22	41	4.56	6	0.67	-	-

(-:0)

前年までの同月と比べ低い水準が続いた。

8) 薬剤耐性アシネトバクター (DRAB) 感染症

DRABは、2011年2月から報告対象となったが、2012年は年間を通して報告はなかった。

9) 薬剤耐性緑膿菌 (DRPA) 感染症

DRPAの累積報告患者数は、男性6人で、定点当たり報告総数0.67で前年の5人を1人上回った。定点当たり報告数の最大値は8月の定点当たり0.33であった。

(5) 性感染症定点把握対象疾患の動向

1) 性器クラミジア感染症

性器クラミジア感染症の累積報告患者数は男性625人、女性704人の計1,329人、定点当たり報告患者総数24.12は前年より減少した。1月から報告数の増加傾向が続き、定点当たり報告数の最大値は9月と10月の定点当たり2.50であった。年齢階級別では、男女とも20～24歳が最も多い。

2) 性器ヘルペスウイルス感染症

性器ヘルペスウイルス感染症の累積報告患者数は、男性160人、女性315人の計475人、定点当たり報告患者総数8.62で、前年と比べ増加した。定点当たり報告数の最大値は9月の定点あたり0.89であった。年齢階級別では、男性35～39歳、女性30～34歳が最も多い。

3) 尖圭コンジローマ

尖圭コンジローマの累積報告患者数は男性122人、女性160人の計282人、定点当たり報告患者総数5.12で、前年より増加した。定点当たり報告数の最大値は5月の定点当たり0.60であった。年齢階級別では、男性30～34歳、女性20～24歳が最も多い。

4) 淋菌感染症

淋菌感染症の累積報告患者数は男性437人、女性82人の計519人、定点当たり報告患者総数9.42は前年より増加した。

定点当たり報告数の最大値は10月の定点当たり0.98であった。年齢階級別では、男性20～24歳、女性20～24歳と25～29歳が最も多い。

(6) 感染症法第14条1項に規定する厚生労働省例で定める疑似症

2012年埼玉県における摂氏38度以上の発熱及び呼吸器症状(明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く。)と発熱及び発しん又は水泡(ただし、当該疑似症が二類感染症、三類感染症、四類感染症及び五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く。)の二つの症候群の届出はなかった。

まとめ

2012年の感染症発生動向調査に基づく患者届出について、各疾患の動向をまとめた。二類感染症は、結核1,409例の届出があり、前年に引き続き減少した。

三類感染症は、細菌性赤痢12例、腸管出血性大腸菌感染症130例、腸チフス1例、パラチフス1例の届出があった。そのうち、細菌性赤痢とパラチフスは前年より増加した。

四類感染症は、A型肝炎、つつが虫病、デング熱、マラリア、レジオネラ症、レプトスピラ症の6疾患の届出があった。そのうち、つつが虫病、デング熱、マラリア、レジオネラ症、レプトスピラ症は前年より増加した。

五類感染症の全数把握対象疾患は、アメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、ジアルジア症、髄膜炎菌性髄膜炎、先天性風しん症候群、梅毒、破傷風、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、風しん、麻しんの計14疾患の届出があった。そのうちアメーバ赤痢、急性脳炎、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、先天性風しん症候群、梅毒、破傷風、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、風しん、麻しんは前年より増加した。

週単位報告対象疾患では、小児科定点報告対象疾患でRSウイルス感染症と感染性胃腸炎の定点当たり報告患者総数

表 5 性年齢階級別報告数(基幹定点・性感染症定点)

年齢	性器クラミジア感染症		性器ヘルペスウイルス感染症		尖圭コンジローマ		淋菌感染症		メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症		ペニシリン耐性肺炎球菌感染症		薬剤耐性緑膿菌感染症		薬剤耐性アシネトバクター感染症	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
0歳	1	-	1	-	-	-	-	-	2	3	3	-	-	-	-	-
1-4	-	-	-	-	-	1	-	-	3	3	16	10	-	-	-	-
5-9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	-	-	-	-
10-14	-	2	1	1	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
15-19	41	130	3	15	3	17	33	11	-	-	-	-	-	-	-	-
20-24	119	207	19	39	18	36	79	22	-	-	-	-	-	-	-	-
25-29	117	163	27	42	12	19	71	22	-	1	-	-	-	-	-	-
30-34	97	89	26	53	30	28	72	9	-	-	-	-	-	-	-	-
35-39	93	62	28	42	13	26	66	7	2	-	-	-	-	-	-	-
40-44	80	34	14	28	21	18	53	9	3	1	-	-	-	-	-	-
45-49	35	9	16	20	10	5	32	2	1	-	-	1	-	-	-	-
50-54	26	7	7	22	4	6	15	-	-	3	-	-	-	-	-	-
55-59	12	1	6	17	1	3	7	-	1	3	-	-	-	-	-	-
60-64	3	-	8	14	4	-	7	-	6	3	-	-	-	-	-	-
65-69	1	-	2	9	3	-	2	-	9	6	-	-	-	-	-	-
70～	-	-	2	13	1	1	-	-	89	39	7	2	6	-	-	-
合計	625	704	160	315	122	160	437	82	116	66	27	14	6	-	-	-
男女比	1.0	1.1	1.0	2.0	1.0	1.3	1.0	0.2	1.0	0.6	1.0	0.5	1.0	0.0	0.0	0.0

が前年を上回った。眼科定点把握対象疾患では、急性出血性結膜炎が、基幹定点把握対象疾患では、マイコプラズマ肺炎とクラミジア肺炎の定点当たり報告患者総数が前年を上回った。

月単位報告対象疾患では、基幹定点報告対象疾患で、薬剤耐性緑膿菌感染症が、性感染症定点報告対象疾患では、性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマ、淋菌感染症の定点当たり報告患者総数が前年を上回った。